

学生 FD 活動年報（2009～2010 年度）

梅村 修¹⁾、山下 貴弘³⁾、播本 奈々³⁾
久川 尚恵³⁾、宮崎 昌規³⁾、赤尾 辰也³⁾
石崎 健³⁾、董 倩好³⁾、奥村 文彦³⁾
大城 千佳³⁾、和田 達哉³⁾、岡崎 蘭³⁾
三上 雄輔³⁾、佐々木慶一³⁾、吉川 貴大³⁾
谷口 晴香³⁾、大津 裕矢³⁾、古川 隆司²⁾

¹⁾国際教養学部教授、教育研究所所長

²⁾社会学部准教授

³⁾学生 FD スタッフ

はじめに

本学教育研究所の教育実践として学生 FD 活動が発足したのは 2009 年 6 月、立命館大学の学生 FD スタッフを招いたセミナーを教育研究所を開催したことがきっかけであった。これに触発された学生たちにより、研究所の教育実践として組織された。その後、徐々に活動を展開し、各大学の学生 FD 活動との交流を重ねて現在に至っている。

本来学生 FD 活動の取り組みについては、年次報告として教育研究所紀要に掲載していくべきであったが、今年度から年次報告を行っていくこととした。なお、これまで活動内容の報告は、教育研究所ニューズレターや大学 HP で随時、また学外の催しでの報告等も行ってきた。本報告は、これらを時系列に沿って整理・編集を行った上、さらなる活動の発展に向けた展望と課題について考察を加えたものである。

1. 報告①（2008 年～2009 年 5 月）

2008 年度に教学担当の学長室調査役であった梅村が落合副学長（当時）の諮問に対して、学生の参加する FD 活動を提言した。

当時大学では 2007 年度に全学 FD 推進委員会が設置され、FD 活動について全学的な取り組みを行おうとしていく途上であった。しかしすでに各学部でも FD 活動が行われながら、全学的な FD との関係の整理が行われない等、全学的な教学改革を組織的に行う体制が十分機能していない状況であった。大学教員による FD 活動が手詰まりに陥っていた状況といってもよい。

このため学生の参加する FD 活動として、先駆的な実践を行ってきた岡山大学等の取り組みを追手門学院大学でも実施し、手詰まりを克服しようというねらいがあったと考えられる。

これについてのちに梅村が以下のように述懐している：

「…私自身も含めて、大学の教員は、自分の授業を反省したり、授業を同僚に公開したり、はたまた学生の評価を付度したりすることは、疎ましい、いとわしい。できれば自分の研究に没頭していたい。学生の声なんかには耳をふさいでいたい。これが赤裸々な本音ではあるまいか。だから、このままFDを教師の裁量だけに任せていても、さしたる実効が上がらないのは目に見えている。

そこで、教育のもう一方の主体である学生、なかでも大学教育に夢と期待を未だ温存しているであろう新入生の目線から、大学の教学改革を進めていくことはできないか。このように考えて、私は5月の連休まで、学内の”意欲的”と評判の学生組織に、FD活動を触れて回ったのである。…（中略）…すると、意外にも、打てば響くように、「おもしろい」「やってみよう」と名乗りを上げてくれる学生が、相当数、現れてきたのである。」¹⁾

2. 報告②（2009年度6～11月）

（1）2009年6月 学生参加型のFD活動

2009年度、教育研究所の所長として梅村が第17回春の教育セミナーで立命館大学から木野茂教授と学生FDスタッフを招き「学生と進めるFD」を企画して木野教授の講演と学生FDスタッフ・同大学教育開発推進機構の職員による過去3年間の活動報告と、グループディスカッションが行われた。グループディスカッションは立命館の学生FDスタッフがそれぞれファシリテーターを担い、大学の教育などについて教職員と学生がともに意見交換を行った。その様子を、辻は以下のように評している：

「5時間目（引用者注、グループディスカッション）は複数のグループに分かれて、活発なディスカッションが出来た。本学の学生は聞くことも、かんがえることも、客観的に反省することも、そして最後は他大学の学生とディスカッションすることも充分できるのである。彼らの可能性をもっと引き出してやる必要がある。そのためには刺激を与えることや、体験をさせることもひとつの方法である。（中略）…本学の学生は原石なのである。知らないことを知ると、そこで新しいチャレンジが出来る。」²⁾

この新鮮な経験は「しゃべり場」という企画としてその後本学FDスタッフの活動でも展開されるようになっていく。教職員と大学の教育について意見を出し合ったこの体験が大きな刺激となり、その後教育研究所が場所を提供し、心理学部の有志学生や学生意識委員会・授業検討委員会の学生へ呼び掛ける形で学生FDスタッフが組織された。かれらは週1回の会合を重ね、月1回の所員会議でも活動報告を行っていくようになった。また、大学教員有志が行っていた本学ブランド化に関する研究会でも学生FDスタッフと定期会合を行い、議論を重ねる中で活動方針や内容を組み立てていくこととなった。

2009年8月29日・30日、立命館大学で「第1回学生FDサミット2009夏」が開催された。これは、学生参加型の教育改革を行ってきた5大学が集まり、学生FDスタッフが中心となって運営し、討議や交流を深める場として始められたものである。本学からも、発足間もない学生FDスタッフの山下・和田・久川・播本の4名と研究所スタッフが参加した³⁾。

(3) 学生 FD スタッフの試行錯誤

このうち授業アンケートは、梅村から秋期教育セミナーで活動報告を行う提案を受けていたため、学生 FD スタッフが初めて一般の学生に向かって行う活動となった。アンケートの内容や実施方法、分析方法について一切を学生 FD スタッフが行っていった。またセミナーの企画にも学生 FD スタッフが初めて加わるなど、所員も助言を行いつつ、かれらの試行錯誤を支援した。しかし、文章力や表現など細かな面で研究所スタッフに依存した状況は続き、まだかれらが成長過程である中での取り組みでもあった。

(1) 2009 年 12 月 秋期教育セミナー

— 97 —

公開しゃべり場でのテーマは以下の通りである。テーマは学生 FD スタッフが議論の末設定を行ったもので、参加する学生や教職員が参加し発言しやすいものが選ばれた：

「こんな授業を受けてみたい」

「大学に来る目的とは」

「授業アンケートは必要か？」

「大学でしか経験できないこと」

セミナーに参加した者から共感を得たことは学生 FD スタッフに自信を与え、また活動成果が認められて翌年度の教育研究所の新規事業として学生 FD スタッフの活動が位置づけられることとなった。

(2) 2009 年 12 月 全学さかさま大学

学生 FD スタッフはこの時期、秋期セミナーを成功裏に終えつつも、もっと充実させられないかという意見や、誰に・何をしていく活動なのかということについてスタッフ内の意識の差が広がっていった。

所員の古川が改革推進経費の助成を受けて開催を予定していた「全学さかさま大学」に、学生 FD スタッフを誘った。従来社会学部の特色ある教育として実施されていた KJ 法を用いて討議を行うプログラムであったが、方法自体の汎用性を生かせば全学部の学生が横断的に参加可能であった。2009 年の 12 月末に実施した 1 泊 2 日のプログラムには学生 FD スタッフが 3 名参加し、ひとつのテーマを掘り下げつつグループで共有する経験を行った。また参加した他の学生との交流も生まれ学生 FD スタッフへの刺激となった。

この時期、学生 FD スタッフから離れるメンバーも出ており、スタッフ組織の中では意識や活動方針をめぐる議論が続けられていた。メンバーの中での役割も決まりつつあったが、自発的な取り組みに至る試行錯誤が続けられていた状態であった。さかさま大学でも、自身の学習と活動について両立していく悩みが語られるなど、この時期は、学生 FD スタッフが組織的な取り組みを確立させていく発達段階であったことが窺える。

(3) 2010 年 1 月 「学び論 C」

2010 年 1 月に、新年度入学予定の高校生を対象にプリアントランスの集いとして開講された学び論 C に、梅村とともに学生 FD スタッフ 3 名が登壇した。これは高校生に向けて発表する初めての機会となったが、かれらが新年度入学予定者に対して、自らの活動を通した大学での学び方を語ったことで、新規メンバーの募集につながる事となった。

立命館大学で開催された「第2回学生FDサミット2009冬」には4名の学生FDスタッフが梅村・増田とともに参加した。ここでかれらは積極的に自らの取り組みを報告、京阪神だけでなく全国的に知られる存在となっていく。

その後春休み期間も、ブランド有志の会との「しゃべり場」等を重ねていった学生 FD スタッフは、徐々に自分たちの活動内容をまとめる取り組みを始め、新年度に向けた準備を重ねていくこととなった。この間もかれらは、コミュニケーション不足やメンバーの相互理解などを感じつつ、自分たちの活動やメンバーそれぞれがどのような役割を担うべきであるか等、グループとしての試行錯誤を続けていった。

(1) 2010 年 4 月 新規メンバーの受入

教育研究所では、2010 年度春期セミナーを学生 FD スタッフに任せることを決めた。学生 FD スタッフの中核メンバーの多くが心理学部学生であり、新年度から落合新学長の体制が発足したこともあり、かれらの企画には学長を交えたしゃべり場というプランが生まれた。

春期セミナーに向けた議論と並行して、かれらは学生 FD スタッフを紹介する様々な取り組みも行っていく。たとえばパンフレット、またのちに「2010 追大報告書－追手門学院大学・学生 FD スタッフ活動記録－」となる報告書、また彼ら自身の手になる活動紹介 DVD であるが、これらは一つ一つ手作りでコンセプトや自分たちの活動理念と目標を内面化していく作業ともなった。この過程はいきおい活動を活発化させ、ML による意見交換、定例会議が週 2 回に増えるなど、活動量が大きく増していった。

春期セミナーの準備は、コンセプトを確定しつつ、当日のプログラムやキーワードなどを練り上げ、統一をはかっていった。また学長との事前打ち合わせや意見交換を重ね、セミナーの開催にこぎつけた。

2010年7月、春期教育セミナーが「追大の未来を考える―学生 with 落合新学長―」と題して開催された。第1部は「学長から」ミニ講演、第2部は学生FDスタッフが活動報告を通して学生の考えを伝える「学長へ」、第3部は「学長と」ともに大学をより良くしていくための提案を行おう

というコンセプトでしゃべり場の開催、という構成となった。しゃべり場には、所員を中心とした教員だけでなく事務局からも若手職員が中心に参加協力を得て、これまでにない活発な議論と積極的な提案がなされていった。

詳細は研究所 News Letter No.45 で報告されているが、落合学長から以下のような講評を受けた：

「…今回のセミナーは私自身にとって、非常に大きな収穫となりました。大きくは二つです。

一つ目は、「学生の生の声」を聴ける場であったこと。勤務部署の関係上、学生と直接的に接する機会がない私にとっては、‘学生が何を想い、どのように考えているか’を知る機会というものは、学生を中心とした大学を考えるにあたって、非常に重要な要素です。

二つ目は、「落合学長による‘学生中心’の大学作りの明確な指針」です。

指針を明確に打ち出すことによって、教員、職員、学生が一丸となり、その方向を向くことが可能となると思います。

今回のセミナーからは、本学が教育のみならず他方向から大学を捉えていく、すなわち学生を中心とした大学作りというものは、「教職学協働」と言えるでしょう。』⁵⁾

(3) 2010年8月 第3回学生FDサミット2010

2010年8月、立命館大学にて第3回学生FDサミット2010が開催、全国から38大学約200名の参加者を集めた。本学からは5名の学生FDスタッフと研究所所員・スタッフ計3名が参加した。1日目は学生と教職員での交流会およびしゃべり場を踏まえ、翌日のしゃべり場につなぐテーマを設定し2日目の討議につなぐという形であった。

学生FDスタッフもすっかり知名度が高まり、1日目夜の懇親会ではさながら全国の学生たちの同窓会という感であった。春に新規加入した1年生スタッフもしっかりと発言するなど、成長が窺えた。

(4) 2010年9月 横浜国立大学FD合宿研修会

2010年9月、大学セミナーハウス（東京都八王子市）で開催された横浜国立大学FD合宿研修会へ学生FDスタッフ4名と梅村・古川が招かれ、学生FDスタッフから活動報告としゃべり場、梅村から「学生とともに進めるFD」、古川から「大学教育は学生が加わることで成り立つ」の講演を行った。横浜国立大学でも大学教育総合センターFD推進部を中心に学生FD活動を発足させようという試みの中で、先駆けて取り組んでいる立命館大学および本学の状況を参考にしたいとの目的での招聘であった。2日目のプログラムに参加するべく本学メンバーも前泊し、横浜国立大学の教職員・学生たちと夜を徹した議論や交流が行われた⁶⁾。

横浜国立大学での研修会に引き続いて、学生 FD スタッフ 4 名と梅村は、岡山大学での「岡山大学 i*see 2010 年～第 1 回大学生改善学生交流」へ参加した。同大学は橋本勝教授のもと全国最初に学生参加型の FD 活動に取り組んでおり、学生発案型授業など他大学への刺激の多いプログラムにも取り組んでいる。今回は「授業改善」ではなく「大学生改善」という、学生たちにとってより身近な課題に学生自らが取り組もうという試みに参加、3 名の学生 FD スタッフが登壇したほか 2 回のグループディスカッションにも積極的に取り組んだ⁷⁾。

(6) 2010 年秋期教育セミナー

このセミナーでのしゃべり場は、セミナーに先立って、学生・教職員から大学の問題点を赤裸々に意見聴取した結果にもとづいて行われ、また当日の様子をビデオ撮影・動画配信をしようという、かなり大胆な試みを加えたものだった。セミナーは盛会に終わったのであるが、動画配信は諸般の事情から見送られた⁸⁾。

秋期セミナーの企画をめぐっては、横浜国立大学の FD 合宿研修会で上京した際、学生 FD スタッフ有志が早稲田大学のアカデミックサークルの学生有志とも事前に交流しており、かれらを招いたセミナー企画も検討されたのであった。しかし学生 FD 活動とは異なるレベルでの交流となる他、学生 FD スタッフ内部でも意見がまとまらなかった。学生 FD スタッフの中には、学習支援・教育開発センターの学生ピアサポーターを兼務する者や、本学キャリア開発部の「日経新聞キャリア超実学塾」の受講を通した学外活動へ熱心な者もあり、この時期、対外的な活動への関心と学生 FD スタッフの活動を充実させようとする方向とが混在していた。たとえば研究室訪問と追大教員図鑑の刊行、職員の SD 研修への参加、追大学生 FD サミットの開催など⁹⁾、さまざまな企画を抱えながら、その方向をうまく収斂していけない状況もみられた。

— 101 —

つつあった。この中で秋期セミナーの経験は、改めて大学における学生参加型の教学改革の課題を示すこととなり、同時に、学生FDスタッフにとってはかれらの活動をどのように成果を示していくかが突き付けられたといっ

(8) 2011年1月 学び論C

新年度入学予定の高校生を招いたプリエントランスの企画として実施されている学び論Cで、梅村と学生FDスタッフ10名が登壇し、かれらは高校生に向けて学生FDスタッフの活動と大学での学び方を講演した。この中で、QRコードを印刷したレジュメを配布し、その場で携帯電話から質問や意見を聴取、iPadを用いて受信し即自的にレスポンスを図るという試みがなされた。

(9) 2011年2～3月

本稿執筆時点ではまだであるが、2011年3月大学コンソーシアム京都主催のFDフォーラムで梅村と学生FDスタッフの久川が登壇、学生参加型のFD活動について報告する予定である。また2011年3月に法政大学で開催される「学生FDサミット2011春」に研究所スタッフと学生FDスタッフが参加予定である。

これらに備え、春休みに初の合宿を企画する等、活動の充実を図りながら、懸案の企画を少しずつ実施していこうとしている。

5. 考察とまとめ—学生FD活動の総括(2009・2010年度)—

以上2009年度と2010年度の活動を概括し、その到達点を確かめつつ次節で課題を考察しておきたい。

学生の参加する大学教育の改革とは、まず学生自身が大学の教育を客観視することであった。日々の講義や演習を漫然と受け身でとらえるのではなく、もっといい授業を受けたいという希望が根底にあるということを、学生FDスタッフは自覚し、またそれに向けた活動を展開していくようになった。これは、この2年間の活動を通してスタッフの学生たちが成長した到達点といえる。

また、到達点の第2は、大学教育や大学そのもののあり方について議論する場を作ったという点にある。しゃべり場をはじめとする公開型の討議だけでなく、毎週の会議を通じて日常的に考える機会が見いだせる。

第3の到達点として、学生FDスタッフの成長である。FDスタッフは教育研究所の活動の一端を担うに至ったのであるが、同時に自発的なグループの成長が進み、徐々にではあるが自らの活動を自ら企画・実践し、振り返ることができるようになっていく。無論まだ十分とはいえないものの、学生FDスタッフ個々で見限りにおいて、かれら自身が学ぶ姿勢を体得してきた。

反面課題として、第1に学生FDスタッフによる活動と大学のFD活動との関係が十分構築され

ないままである。これは大学組織の課題も孕みつつも、職員による SD 活動との連携が図られてきていることから、徐々にではあるが変化していく可能性も含んでいる。

第 2 に、イベントを中心とした活動に偏り、日々の活動がそのための準備に偏ってきたことがある。日常的に取り組む活動をかれら自身も考えつつ、まだ実現できていない。

第 3 に、学内でなく対外的なインセンティブで活動が成長してきたということがある。学生 FD スタッフを呼びかけた梅村や学生 FD スタッフ自身も気づいているように、学生 FD の活動が学内で十分認知されていないことは、本来的な学生参加型の FD 活動としてはまだ発展途上にあるといっている。

第 4 に学生 FD 活動のあり方である。大学における学生の活動がまだ教職員のイニシアチヴのもとで営まれているため、主体的な取り組みが進んだとはいえ、まだ構造的に「大学を変える」とこれまでの学生 FD サミットが掲げたような取り組みへ至っていない¹⁰⁾。これは、学生の主体的な活動が過去 30 年間の停滞を経て、ようやくドメスティックな形ではあるが、教育改善を促す試みとして FD・SD に関心のある教職員との共同歩調を築き始めた¹¹⁾。しかしこれとて、大学そのものの冬の時代における存在としてであるが。

第 5 は、根本的な人員の確保と活動の継続性である。活動を担う学生 FD スタッフはやがて卒業していくが、多くの学生活動の例にみるまでもなく、組織がどうやってバトンをつないでいくのか。これも大きな課題である。

おわりに

大学教育は社会状況を反映しつつ、いま、全入時代の中で学生確保と新卒者の就職内定状況の悪化という、入口と出口の面で苦難に向き合っている。本学とて例外ではない。しかし、大学が高等教育機関として果たすべき教育活動を充実させるための試行錯誤は、大学執行部や教職員によるだけでは十分機能しない。既に学生の声へ真摯に耳を傾け、柔軟だが確固とした「学士力」を獲得できるような教育のあり方が求められているからである。

この中で学生参加による FD 活動の一つとして、本学の学生 FD スタッフは 3 年目の活動を迎える。イベント中心で、対外的に評価されるだけの存在でとどまっているとすれば、大学の教育改革ブームにおけるあだ花になってしまう。確固とした活動実績で地歩を築いてきたことにもとづいて、日々の教育活動を学生とともに取り組むような教育へ舵を切る原動力となっていくことが望まれる。

註

1) 追手門学院大学教育研究所 News Letter No.43 を参照のこと。

2) 追手門学院大学教育研究所 News Letter No.41 を参照のこと。

- 3) 詳細は追手門学院大学教育研究所 News Letter No.42、増田祥子「第 1 回学生 FD サミット 2009『大学を変える、学生が変わる。』に参加して」を参照のこと。
- 4) 追手門学院大学教育研究所 News Letter No.43 を参照のこと。
- 5) 追手門学院大学教育研究所 News Letter No.45 を参照のこと。
- 6) 追手門学院大学教育研究所 News Letter No.45 を参照のこと。
- 7) 追手門学院大学教育研究所 News Letter No.45 を参照のこと。
- 8) 詳細は追手門学院大学教育研究所 News Letter No.46 で報告される予定である。
- 9) 「2010 追大報告書」を参照のこと。
- 10) 田口は現状を分析し「学生スタッフが“自発的に行うもの”ではなく、所員に“与えられているもの”となっている」とその自発性に疑問を呈する。田口了麻（2010）「追手門学院大学の学生 FD」、社会的事象に関する実証研究会編（2010）：学生参加による大学教育、FIPs。
- 11) 大学における FD 活動が義務化され、各大学とも教育改善の取り組みとして組織的な試みがいっそう広がっていくと考えられる。